



何かに情熱を注いでいる方を紹介します

## 私と ACP

老人保健施設なんぐん館  
総括部長兼支援相談部門長

のりこ  
守口法子さん

ACP（アドバンス・ケア・プランニング）とは、もしものときのために、本人が望む医療やケアについて前もって考え、家族や医療・ケアチームなどと繰り返し話し合い、共有する取り組み。

【ACPに取り組む なんぐん館独自の「3つの質問」】

①希望する終末期の医療 ②希望する最期の場所 ③今後したいこと



### いつかは誰にでも訪れる最期、だから今をどう生きるのか

平成10年のなんぐん館開設と同時に支援相談員として勤務を始めた守口さん。日々の勤務の中で突然訪れる入所者の終末期という場面に何度も立ち会ってきました。ご家族は心の整理がつかないまま別れを迎え、その光景を見守ることしかできない悲しさを抱き続ける中で、「一人一人の生きた証をみんなで尊重し合える場面を作れないか」と考えるようになり、平成18年から看取りの取り組みを始めました。令和3年にはターミナルケア委員会の立ち上げに尽力し、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の取り組みを先導。終末期の医療やケアについて本人が希望を考え、家族や医療・介護の専門職と話し合うプロセスを大切に、入所者の想いを聴く「人権の尊重」に力を入れています。

この取り組みの原点には、幼い頃から「誰しも必ず最期の時が来るからこそ、今をどう生きるかが大事」と両親から教えられてきたことが大きく影響していると話します。高校時代には近所の病院にある重症心身障害児（者）病棟でのボランティアに行き、その経験がきっかけとなり福祉の道へ進学。障がいがあってもなくても、高齢になっても、誰もが地域で自分らしく暮らせる社会を目指す考え方等を学び、「人の尊厳を守る」ことの大切さを知ったことが、今でも守口さんの中に大きな学びとして生き続けています。

なんぐん館でACPを導入した当初は利用者の想いを聴くことに不安を抱く職員もいましたが、想いを聴いてもらえることに喜びを感じる入所者の声が多く、現在では9割以上の入所者から希望を聴くことができています。また、施設独自の『ACP新聞』を発行し、実際に自宅での看取りを行ったご家族の声を紹介するなどして、利用者や家族への啓発にも取り組んできました。

「自分の最期は自分で考え、周囲に伝えておく」という意識を一人でも多くの方に持ってもらいたいと話守口さん。「ACPは高齢者だけの話しではなく、若い元気なうちからを実践していくことが今後重要になってくるのではないかと、さらなる取り組みの展開と関係機関との連携強化に意欲を見せています。

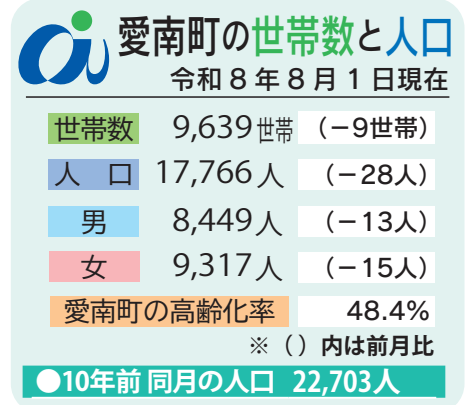
#### 編集後記

自分が学生の頃、体育祭の大型パネルを描くのに苦戦した経験から「大きな絵を描くのは本当に難しかったな…」と思いつきながら防潮堤アートの取材に向かいました。しかし現地で見つけた作品は、そんな思い出を吹き飛ばすほどのクオリティ！猛暑に負けず、愛南の海や「なーしくん」を伸び伸びと描き上げる高校生たちのたくましい姿が眩しかったです。地域を明るく彩る、生徒たちの情熱が詰まった温かい作品。ぜひ現地でご覧ください。

ホール内に迫力のサウンドが響き渡った「自衛隊ふれあいコンサート」。第14音楽隊と南宇和高校吹奏楽部による合同演奏では、世代を超えて重なる圧巻の音色にすっかり魅了され、思わずカメラを構える手を止めて見入ってしまいました。「ハッ」と我に返り、慌ててシャッターを切ったのはここだけの秘密です。音楽を通じて地域が一つになる温かさを間近で体感しつつ、広報担当という立場を忘れてファンとして楽しんでしまった取材でした。

#### 編集・発行

愛南町役場 総務課 〒798-4196 愛媛県南宇和郡愛南町城辺甲 2420 番地 電話：(0895)72-1211 FAX：(0895)72-1214



<https://www.town.ainan.ehime.jp/>